

「ドラえもん」に学ぶ

校長 田邊 泰

「ドラえもん」は、1969年から小学館の雑誌で連載されてから現在に至るまで、日本に止まらず、海外でも東アジアを中心に高い人気を誇っているマンガです。30年ほど前に、バンコクを訪れた際も、マンガやビデオがデパートのおもちゃ売り場で販売されておりました。

「ドラえもん」の基本的なプロットは、「ドラえもんがポケットから出す多種多様な秘密道具で、のび太にふりかかった災難を解決したり、夢をかなえたりする」というパターンです。

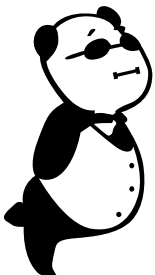
しかし、マンガを詳細にみても、ドラえもんがのび太のすべての夢を叶えているわけではないようです。のび太が「自分のわがままで、他人を傷つけたり、不幸にしたりする」ような願いは、叶えていないのです。

例えば、のび太が「ジャイアンやスネ夫が、何でも自分（のび太）の言うことを無条件にきくロボットのように改造してほしい。」と、ドラえもんに頼んだことがありました。しかし、こんな願いは、断固拒否します。そして反対に、のび太を叱って反省を促すのです。

さて、幕末に日本にきた外国人が、日本人の子育てについて以下のように述べたそうです。「私は日本が子どもの天国であることをくりかえさざるを得ない。世界中で日本ほど、子どもが親切に取り扱われ、そして子どものために深い注意が払われる国はない。ニコニコしている所から判断すると、子どもたちは朝から晩まで幸福であるらしい。」と。

しかし、私たちは、ただ単に子どもをかわいがっていただけではありませんでした。ドラえもんのように、必要に応じて、間違った方向へ進もうとした際には、しっかりと導いてきたのです。それは、子どもを指導する際の言葉が、何種類もあることからわかります。

例えば「たしなめる」「注意する」「諭す」「教え諭す」「叱りつける」「言い聞かせる」「叱る」「戒める」「怒る」「とがめる」「問いただす」「懲らしめる」「しぼる」「とっちめる」「なじる」などです。子どもを導くのに、これだけ多くの言葉を持つ国は、ないと思っています。



子どもの年齢や性格、指導すべき状況などによって丁寧に使い分けているのは、まさに愛情の賜物です。私たちが「ダメなことはダメ」「ならぬことはならぬ」と伝えることは、教育の基本であり、必要不可欠ですが、子どもにかける言葉を丁寧に選び、愛情をこめて子どもに対していきたいものです。